

現場職員の自己覚知を促進するリフレクティブな学習

—エンプティチェアテクニックを用いたワークマニュアルを作成、使用して—

○ 十文字学園女子大学 氏名 大山 博幸 (会員番号 6129)

キーワード：自己覚知 職員研修 エンプティチェアテクニック

1. 研究目的

通常、福祉現場で利用者の援助に従事する職員（以下、現場職員）の業務における中心的な取り組みは、例えば相談援助過程やケアマネジメント過程にみられるように、利用者の生活上の問題解決過程の実施である。しかしながら現場職員が直面する利用者の問題には必ずしも容易に解決しえないものも多い。その場合いったん問題解決志向から離れ、現場職員自身のよりオルタナティブな解釈やとらえ方を獲得するために、現場職員自身の変容を期待する自己覚知を目指す学習がかわりに必要となってくる。ここでいう自己覚知とは、援助における利用者との関係の中での気づきであり、あるいは援助状況の中の援助者としての現場職員自身への気づきである。このような気づきから現場職員は自身のあり様やものの見方への変容を促すものである。そこで現場職員は自己覚知を目指す学習の方法について知り学ぶ必要がある。関係の中での自己覚知を得るには、認知的な過程のみならず現場職員自身の内的感情的な過程をも含みこんだリフレクティブな学習が必要となる。また現場職員は日々の（多忙な）通常業務を遂行する中でこのような学習を限られた時間の中で行っていかなければならない。これらのことを踏まえ、筆者は現場職員の自己覚知を促進するリフレクティブな学習として、エンプティチェアテクニックを用いたワークマニュアル「気になる利用者になってみる」ワークシートを作成し、介護福祉士を持つ現場職員を対象に実施した。本研究はこの自己覚知を促進することを目的に作成したワークマニュアルを使ったリフレクティブな学習の運用を効果的に進めていくための要件を、質問紙調査の結果から明らかにする。

2. 研究の視点および方法

平成23年12月に行われたS県の事業である認定介護福祉士養成研修本講義受講者75名（男性33名、女性42名）を対象とした。本研修中、自己覚知に関する内容の講義をした後、本ワーク実施直前に、加藤・高木（1980）の情動的共感性尺度（25項目、7段階評定）を実施した。次に「気になるご利用者（ご家族）になってみる」ワークをあらかじめ作成したワーク実施マニュアルに沿って説明し、筆者（研修講師）が任意の受講者を対象にワークを教示する促進者となってワークのデモンストレーションを行った。その後受講者2人一組で、一人はワーク実施者として、もう一人はそのマニュアルを用

いてワークを教示する促進者としてワークを実施した。ワークは一人が2回（2場面）ずつ交互に行った。ワーク実施直後、ワーク実施直前に行った情動的共感性尺度及び、本ワークの実施に関する調査票（ワークを体験したことに関する質問11項目、パートナーに教示したことに関する項目5項目、いずれも5段階評定。また本ワークに関する全体的な満足度に関する質問1項目、10段階評定、および本ワーク体験に関する自由記述を求める質問1項目。対象者自身に関する属性を問う質問4項目〈性別、年齢、就業経験年数、習得している関連資格〉）の記入を無記名で求めた。

3. 倫理的配慮

本調査を行うに当たり本研修のはじめに、本研修受講生に調査協力を依頼した。調査は、無記名の質問紙形式で行い結果は統計的に処理するため個人は特定されないこと、また調査結果は研究者が研究の目的にのみ使用し、本研修の成績評価とは関連がないことを伝えた。また本研究を発表することの了解をS県研修担当者から得た。

3. 研究結果

情動共感性尺度の前後の結果を比較したが有意な差はみられなかった。本ワーク全体の満足度（ $n=72$ ）は、平均 7.14 であった（ $SD\pm 1.04$ 、最大 9、最小 5）また女性よりも男性は得点が高く有意な傾向がみられた（ $t(69)=2.52, p<.05$ ）。なお平均年齢は女性が高く有意な傾向がみられた（ $t(68)=3.31, p<.01$ ）。ワークを体験したことに関する質問結果では、「このワークは、とりあげた利用者（あるいは家族）とのかかわりを振り返るのに役立った」（ $n=75$, 平均 4.28, $SD.73$ ）や「このワークの体験は、これからの自分の仕事に役に立つ」（ $n=75$, 平均 4.27, $SD.66$ ）という項目の得点が高かった。また全体的な満足度を従属変数とし、ワークを体験したこと及びパートナーへの教示をしたことに関する質問計 16 項目を独立変数として SPSS statistics 18 を用いて重回帰分析（ステップワイズ法）を行ったところ、「このワークの体験はこれからの自分の仕事に役に立つ」の項目から全体的な満足度への標準偏回帰係数は正の値を取り 0.1%の有意な傾向であった。（ $\beta=.72, p<.001$ ）、また「ワークは楽しかった」の項目から全体的な満足度への標準偏回帰係数においても正の値を取り 5%の有意な傾向であった（ $\beta=.24, p<.05$ ）また自由記述からは受講生においておおむねさまざまな水準での自己覚知が得られたことがうかがえた。

5. 考察

全体的な満足度やワークを体験したことに関する質問のいくつかの結果から、本学習は受講者からおおむね有用であると受け取られたことが示唆された。現場職員が研修時の学習に対してもつ有用感は重要であると考えられる。しかしながら、自己覚知を推進することの効果は結果から明確に得られたとは言えず今後の課題である。